

同志社大学文化情報学部蔵『源氏絵所屏風言葉書』翻刻と考察（桐壺巻／野分巻）

福田 智子・穂満 建等・高瀬 真里奈

『源氏絵師屏風言葉書』は、江戸時代中期写とされる卷子本である。『源氏物語』五十四帖の本文を、一帖につき一箇所ずつ抜き書きしたもので、これに対応する源氏絵を屏風に描く目的で作成されたものと推察される。本文は、北村季吟『湖月抄』（延宝三年（一六七五）刊）と、ほぼ一致する。すなわち、青表紙本系統の肖柏本に近い本文をもつ帖が目立ち、河内本系統の本文の影響はまずなく、別本の本文を有する箇所が少数ながら見られる。また、本書が示す源氏絵の図柄を推定すると、『源氏物語』承応三年（一六五四）版本の挿絵におおよそ包含されるが、若干の例外が存する点は今後の課題である。

一 はじめに

本書は、『ABAJ貴重書目2017』（ABAJ日本古書籍商協会）三七頁に「60 源氏絵師屏風言葉書」（ただし、内題は「源氏繪所屏風言葉書」。以下、本書の名称は内題に拠る。略称「絵所」として掲載された卷子本である。二〇一七年四月、中尾松泉堂書店から同志社大学文化情報学部文献室に購入された（請求記号721.21G9208）。

同目録には、江戸時代中期頃写、一卷、鳥の子紙、縦二六センチ、横五メートル八〇センチとある。内容は、『源氏物語』五十四帖の本文を、一帖につき一箇所ずつ抜き書きしたもので、これに対応する源氏絵を屏

風に描く目的で作成されたものと推察される。

そこで本稿では、『源氏絵所屏風言葉書』桐壺巻から野分巻までを翻刻し、その本文を『源氏物語』諸本中に位置付けるとともに、当該箇所の絵柄について、『源氏物語』承応三年（一六五四）版本の挿絵を参看しながら推察する。

二 翻字

凡例

一、冒頭に、巻の通し番号と巻名を示す。

一、翻刻本文は、漢字・仮名ともに通行の字体を用いるが、できる限り本書の原態を尊重する。

1、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。

2、濁点や句読点は付さない。

3、改行や字下げなどは、可能な限り原本の字の配置を生かす。

一、校異は、表記の相違は示さず、語の異なりのみを示す。異同箇所は「絵所」本文の行数を付して挙げる。

【校異1】北村季吟『湖月抄』（延宝三年（一六七五）刊）本文との比較を行う。『湖月抄』のテキストは、『源氏物語湖月抄（上）増注』『源氏物語湖月抄（中）増注』（北村季吟著・有川武彦校訂、講談社学術文庫314・315、一九八二年五月）に拠り、「絵所」の該当箇所を、上（あるいは中）一頁一行（本文の行数）と記す。また、異同箇所は「絵所本文↕湖月抄本文」の順に示す。

【校異2】『源氏物語大成』（中央公論社、一九八九年八月普及版再版。略称「大成」）に拠り、「絵所」の該当箇所を、巻数―頁（底本の名称）と記す。

「絵所」の「大成」底本との異同箇所について、「絵所」本文と一致する伝本がある場合には、「Ⅱ」を用いて、その伝本の名称を本文系統の略号とともに記す。

・青表紙本系統 〈青〉 ・河内本系統 〈河〉
・別本 〈別〉

次に、異同箇所を、「絵所本文↕大成底本文」の順に示す。

最後に、「絵所」と全文が一致する伝本を、系統の略号とともに※を付して挙げる。

一、「絵所」本文の『源氏物語』における【該当箇所】を示す。角川古典大観『源氏物語』CD-ROMに拠り、その箇所を含む節の見出しを挙げるとともに、同CD-ROMの「参考情報」機能を用いて、以下の校訂本文の該当巻数―頁数を列挙する。

・日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「大系」
・新日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「新大系」
・日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「全集」
・新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「新全集」
・新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社） 略称「集成」
・角川文庫『源氏物語』（角川書店） 略称「文庫」
・玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店） 略称「評釈」
なお、見出しは、必ずしも「絵所」の本文を過不足なく説明するものではない。

一 桐壺

【翻字】

きりつほ

其ころこまうとのまいれるか中に賢きさう人有
けるをきこしめして宮のうちにめさむはうた
のみかとの御戒あれはいみしう忍びて此
御子をころくわんにつかはしたり御うしろみたち
てつかうまつる右大辨のこのやうにおもはせてゐて
たてまつる

【校異1】「湖月抄」上―35―1／「2」めさむは↕めさむことは

【校異2】「大成」1-20（底本・池田本 伝二條為明筆）

「1」まいれるか〓「青」肖柏本・三条西家本↑まいれる 「2」めさむは〓「別」陽明家本・国冬本↑めさんことは 「6」たてまつる〓「青」肖柏本・三条西家本↑たてまつるに ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「21」高麗の相人による若宮の観相もあって、帝は源氏にすることを決意 「大系」1-43、「新大系」1-19、「全集」1-115、「新全集」1-39、「集成」1-31、「文庫」1-41、「評釈」1-113

二 帚木

【翻字】

は、き、

徒と降くらしめやかなるよひの雨に殿上にも
おさ／＼人すくなに御とのゐ所もれいよりはのとや
かなる心ちするにおほとなふら近くてふみとも
など見給つゐてにちかきみつしなる色／＼の紙
なるふみともをひきいて、中将わりなくゆかしかれは
さりぬへきすこしは見せんかたわなるへきも

こそとゆるし給はねはそのうちとけてかたはら
いたしとおほされんこそゆかしけれをしなへたる
おほかたのは数ならねとほと／＼につけてかき
かはしつゝも見侍なんをのかし、恨めしきおり／＼
まちかほならんたくれなどのこそ見所はあらめと
えんすれは

【校異1】「湖月抄」上-59-5／異同なし

【校異2】「大成」1-36（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「4」見給つゐてに〓「河」全て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本）、「別」国冬本↑み給 ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「3」五月雨の夜、源氏と頭の中將は女性の消息をめぐつての話をする 「大系」1-56、「新大系」1-33、「全集」1-131、「新全集」1-55、「集成」1-46、「文庫」1-51、「評釈」1-166

三 空蟬

【翻字】

うつせみ

わかきひとは何心なくいとよくまとろみたるへし
かゝるけはひのいとかうはしくうちにほふにかほを
もたけたるにひとへうちかけたる木帳のすき間
にくられれとうちみしろきよるけはひいとしるし
あさましくおほえてともかくも思わかれすやをら
おきいて、すゝしなるひとへひとつをきてすへり
出にけり

【校異1】「湖月抄」上-154-2／異同なし

【校異2】「大成」1-90（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」いとよく〓「青」横山本・肖柏本・三条西家本・伝冷泉為秀筆本（く）
見セ消チ「う」↑いとよう 「6」ひとへひとつを〓「青」池田本・三
条西家本（ひとつ）見セ消チ↑ひとへひとつ ※全文一致伝本（青）
三条西家本（ただし見セ消チあり）

【該当箇所】「6」源氏は部屋に忍び入るが、それと気づいた空蟬はすべ

り出て隠れる「大系」1―115、「新大系」1―89、「全集」1―198、「新全集」1―124、「集成」1―112、「文庫」1―99、「評釈」1―320

五 若紫

【翻字】

若紫

四 夕顔

【翻字】

夕良

惟みつにしそくめして有つるあふき御らんすれは
もてならしたるうつりかいとしみふかうなつかし
うておかしうすさひかきたり

心あてにそれかとそ見る白露のひかりそへ

たるゆふかほの花

【校異1】「湖月抄」上―168―6／異同なし

【校異2】「大成」1―104（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「2・3」なつかしうて「青」御物本・横山本・肖柏本・三条西家本↓

なつかしくて「3」すさひ「青」横山本・榊原家本・池田本・肖柏

本・三条西家本、〈河〉全て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・大島

本・鳳来寺本）、〈別〉陽明家本↓すさみ ※全文一致伝本…〈青〉肖柏本・

三条西家本・横山本

【該当箇所】「4」源氏は扇の歌を見、惟光に隣の家を調べさせ、返しの歌をつかわす「大系」1―126、「新大系」1―103、「全集」1―213、「新全集」

1―139、「集成」1―125、「文庫」1―108、「評釈」1―354

京の花さかりはみな過にけり山のさくらはまた盛

にていりもおはするまゝに霞のたゝすまひも

おかしうみゆれはかゝる有さまもならひ給はす所せき

御身にてめつらしうおほされけり寺のさまもいと

哀なり嶺たかくふかくいはの中にそひしり

入るたり

【校異1】「湖月抄」上―237―9／「5」ふかく↓ふかき 「6」入るた

り↓入るたりける

【校異2】「大成」1―151（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「5」ふかく↓ふかき 「6」入るたり↓いりるたりける ※全文一致伝

本…なし

【該当箇所】「1」源氏は瘡病の煩いにより、北山の聖のもとを訪れる

「大系」1―177、「新大系」1―152、「全集」1―273、「新全集」1―199、「集

成」1―183、「文庫」1―151、「評釈」2―50

六 末摘花

【翻字】

すゑつむはな

かとはまたあけさりければかきあつかりたつね出たれば

おきなのおといみしきそ出きたるむすめにやむまこ

にやはしたなるおほきさの女のきぬはゆきにあひ

てす、けまとひさむしと思へるけしきふかうて

あやしき物に火をたゝほのかにいれて袖くゝみにもた

りおきな門をえあけやらねはよりてひきたすくる

いとかたくなゝり御ともの人よりてそあけつる

ふりにけるかしらのゆきを見る人もをとら

すぬらすあさの袖かな

【校異1】「湖月抄」上―347―1／「1」かきあつかり↓かぎのあづかり

【校異2】「大成」1―223（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」かきあつかり〓「青」肖柏本↕かきのあつかり ※全文一致伝本…

「青」肖柏本

【該当箇所】「16」門番の翁の門を開けかねる姿に同情を寄せる「大系」

1―259、「新大系」1―227、「全集」1―369、「新全集」1―296、「集成」

1―273、「文庫」2―40、「評釈」2―225

七 紅葉賀

【翻字】

紅葉賀

いか、思ふらんとさすかに過しかたくてもものすそを

ひきおとろかし給へればかはほりのえならすゑ

かきたるをさしかくしてみかへりたるまみいたう

みのへたれとまかはゝいたくくろみおちいりていみ

しくはつれそゝけたり

【校異1】「湖月抄」上―391―5／異同なし

【校異2】「大成」1―254（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「4」まかはゝいたく↕まかはらいたく「4・5」いみしく〓「青」柿

原家本・三条西家本↕いみしう ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「17」源氏は好色な老女源の典侍とたわむれる「大系」1―

290、「新大系」1―259、「全集」1―409、「新全集」1―337、「集成」2―

34、「文庫」2―67、「評釈」2―301

八 花宴

【翻字】

花宴

おほろ月夜にる物そなきとうちすしてこなたさま

にくるものかいとうれしくてふと袖をとらへ給女

おそろしと思へるけしきにてあなむくつけこはた

そとの給へと何かうとましきとて

深き夜のあはれをしるも入月のおほろけなら

ぬちきりとそおもふ

【校異1】「湖月抄」上―411―10／異同なし

【校異2】「大成」1―271（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「1・2」こなたさまに〓「青」大島本・陽明家本（ただし上記二本「は」

補入）↕こなたさまには ※全文一致伝本…「青」大島本・陽明家本（た

だし書き入れあり）

【該当箇所】「3」源氏は弘徽殿の細殿で朧月夜と逢い、扇をしるしに取

り替えて別れる「大系」1―305、「新大系」1―276、「全集」1―426、「新

全集」1―356、「集成」2―52、「文庫」2―79、「評釈」2―336

九 葵

【翻字】

あふひ

斎宮の御母御息所のおほしみたる、なくさめにも
 やとしのひて出給へるなりけりつれなしつくれとを
 のつから見しりぬさはかりにてはさないはせそ大將殿
 をそかうけにはおもひきこゆらんといふをその御かたの
 人／＼もましれ、はいとおしとみなからよういせんもわ
 つらはしければしらすかほをつくるつるに御車とも
 たてつ、けつれはひとたまひのをくにをしやられて
 物もみえず

【校異1】「湖月抄」上143312／異同なし

【校異2】「大成」11286（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

〔5〕人／＼も〓〔河〕全て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・源氏古註・大島本）、〔別〕全て（御物本・陽明家本）↑人も〔5〕ましれ、は〓〔青〕横山本・柳原家本・池田本・肖柏本・三条西家本（底本を除く青表紙本）↑ましれは ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】〔5〕葵の上は急に御禊見物に出かけ、六条の御息所の車と所争い「大系」11321、「新大系」11294、「全集」216、「新全集」2123、「集成」2170、「文庫」2192、「評釈」21375

十 賢木

【翻字】

さかき

榊をいさ、かおりてもたまへりけるを

さしいれてかはらぬいろをしるへにてこそいか

きをも越侍にけれさも心うくと聞え

たまへは

神かきはしるしのすきもなきものをいかにまかへて

おれるさかきそ

【校異1】「湖月抄」上149817／異同なし

【校異2】「大成」21336（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

〔2・3〕いかきをも〓〔青〕肖柏本・三条西家本〔別〕陽明家本・国冬本↑いかきも ※全文一致伝本…〔青〕肖柏本

【該当箇所】〔3〕御息所はためらいながらも源氏と対面し、歌の贈答

〔大系〕11370、「新大系」11345、「全集」2179、「新全集」2187、「集成」21131、「文庫」21136、「評釈」21501

十一 花散里

【翻字】

花散さと

郭公ありつるかきねのにやおなしこゑにうちなく
 したひきにけるよとおほさるゝほともえんなり
 かしいかにしりてかなとしのひやかにうちすし給

たちはなのかをなつかしみ郭公はな散さとを

たつねてそとふ

【校異1】「湖月抄」上156615／異同なし

【校異2】「大成」21389（底本…定家本 藤原定家筆 前田家蔵）異

同なし ※全文一致伝本…〈青〉定家本（底本）・大島本・横山本・伝二
條為明筆本・三条西家本

【該当箇所】「3」麗景殿の女御と昔語りをし、歌の贈答 「大系」 1―
419、「新大系」 1―397、「全集」 2―148、「新全集」 2―156、「集成」 2―
196、「文庫」 2―185、「評釈」 2―641

十二 須磨

【翻字】

須磨

きやうたいにより給へるにおもやせ給へるかけの我ながら
いとあてにきよらなれはこよなうこそおとろへにけれ

このかけのやうにやせて侍るあはれるわさかなとの
給へは女君なみたをひとめうけて見をこせ給へるいと
忍ひかたし

身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬか

かみのかけははなれし

【校異1】「湖月抄」上―582―4／「3」かけのやうに↓かげのやうにや

【校異2】「大成」 2―403（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「3」かけのやうにⅡ〈青〉横山本（に）補入…三条西家本（や）補入、
〈別〉御物本↓かけのやうにや 「4」なみたをⅡ〈青〉底本以外全て（横

山本・池田本・飯島本・肖柏本・三条西家本）、〈河〉全て（七豪源氏・
高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本）〈別〉全て（御物本・陽明家本）
↓なみたひとめ ※全文一致伝本…〈青〉三条西家本（ただし、補入あり）

【該当箇所】「7」帥の宮、三位の中將の訪れ、鏡に映る姿を見ての源氏

と紫の上との歌の贈答 「大系」 2―20、「新大系」 2―12、「全集」 2―
164、「新全集」 2―173、「集成」 2―212、「文庫」 3―29、「評釈」 3―
41

十三 明石

【翻字】

あかし

思ふとち見まほしき入江の月影にも

まつこひしき人の御ことをおもひ出き

こえ給にやかてむまひき過てを

もむきぬへくおほす

秋のよのつきけのこまよわか恋る雲井にかけれ時のまもみん

【校異1】「湖月抄」上―667―11／異同なし

【校異2】「大成」 2―463（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「5」雲井にⅡ〈青〉肖柏本↓雲ゐを ※全文一致伝本…〈青〉肖柏本

【該当箇所】「17」八月十三日の夜、入道の誘いにより、源氏は岡辺の女
の宿を訪れる 「大系」 2―82、「新大系」 2―76、「全集」 2―245、「新
全集」 2―255、「集成」 2―289、「文庫」 3―87、「評釈」 3―216

十四 滯標

【翻字】

みをつくし

水鶏たにおとろかさすはいかにして荒たるやとに月を入まし

いとなつかしういひけち給へるそとりくゝにすて

かたき世かなかゝるこそ中／＼身もくるしけれと

おほす

【校異1】「湖月抄」中12216／異同なし

【校異2】「大成」21496（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」入まし〃〈青〉横山本・池田本・肖柏本、〈河〉全て（御物本・七豪源氏・高松宮家本・大島本・尾州家本）↑いれましと ※全文一致伝本・〈青〉肖柏本

【該当箇所】「13」源氏は久しぶりに花散里を訪れ、おだやかな性格をあらためて認識しながら一夜語る 「大系」2115、「新大系」2109、「全集」21288、「新全集」21298、「集成」3128、「文庫」3117、「評釈」31301

十五 蓬生

【翻字】

蓬生

しけき草よもきをたにかき拂はん物とも思ひより給はす
かゝるまゝにあさは庭の面もみえずしけりよもきは軒
をあらそひて生のほるむくらは西東のみかとをとちこ
めたるそたのもしれれとくつれかちなるめくりの垣を
馬うしなどのふみならしたるみちにて春夏になれば
はなちかふあけまきのこゝろさへそめさましき

【校異1】「湖月抄」中15515／異同なし

【校異2】「大成」21522（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「2」しけり〃〈青〉御物本（「き」見せ消チ「り」・肖柏本、〈河〉全

て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・大島本・鳳来寺本・曼殊院本）、

〈別〉陽明家本↑しけき ※全文一致伝本・〈青〉御物本（ただし見せ消チ・書き入れあり）

【該当箇所】「3」末摘花の窮乏と邸内の荒廃の様子 「大系」2140、「新大系」21135、「全集」21319、「新全集」21329、「集成」3159、「文庫」31138、「評釈」31375

十六 関屋

【翻字】

せきや

ゆくくとくとせきとめかたき泪をやたえぬし水と人はみるらん

えしり給はしかしと思ふにいとかなし

【校異1】「湖月抄」中18416／異同なし

【校異2】「大成」21548（底本・大島本 飛鳥井雅康筆） 異同なし

※全文一致伝本・〈青〉大島本（底本）・榊原家本・肖柏本・三条西家本
〈河〉七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・大島本・鳳来寺本・曼殊院本（別）
平瀬家本

【該当箇所】「2」源氏の石山への願はたしの車を避けるため、空蟬の一行は関山で控える 「大系」21164、「新大系」21160、「全集」21351、「新全集」21361、「集成」3187、「文庫」31158、「評釈」31449

十七 絵合

【翻字】

繪あはせ

内のおと、権中納言まいり給その日帥の宮もまいり給

へりいとよしありておはするなかにゑをなんたて、

このみ給へはおと、のしたにす、め給へるやうやあらん

ことくしきめしにはあらて殿上にさふらひ給ふ

を仰ことありておまへにまいり給ふ此判つかうま

つり給ふ

【校異1】「湖月抄」中110-1／異同なし

【校異2】「大成」2-569（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「2」なかにⅡ〈青〉肖柏本・三条西家本Ⅱうちに 「2」ゑをなんたて、

Ⅱ〈青〉肖柏本・三条西家本Ⅱゑを 「4・5」さふらひ給ふをⅡ〈青〉

三条西家本Ⅱおはするを 「5」おまへⅡ〈青〉横山本・陽明家本・三

条西家本・肖柏本「まへ」見せ消チ「まへ」Ⅱ御こせむ ※全文一致

伝本…なし

【該当箇所】「11」源氏と権中納言方との絵の争い、判者の蛸の宮は優劣

を定めかねる 「大系」2-183、「新大系」2-180、「全集」2-376、「新

全集」2-386、「集成」3-109、「文庫」3-174、「評釈」4-51

十八 松風

【翻字】

松かせ

野にとまりぬる君達ことりしるし

はかりひきつけさせたる萩のえたな

とつとにしてまいれりおほみきあ〇た、^ま

ひすむなかれて川のわたりあやうけ

なれとゑひにまきれておはしましくらしつ

【校異1】「湖月抄」中144-2／異同なし

【校異2】「大成」2-594（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「4・5」あやうけなれとⅡ〈青〉肖柏本Ⅱあやうけなれは

※全文一致伝本…〈青〉肖柏本

【該当箇所】「13」桂殿での饗宴、宮中からの勅使の訪れと人々の和歌の

唱和 「大系」2-208、「新大系」2-206、「全集」2-408、「新全集」2

-418、「集成」3-139、「文庫」3-196、「評釈」4-121

十九 薄雲

【翻字】

うす雲

おひそめしねもふかければ武隈の姿にこまつ

のちよをならへんのとかにをとなくさめ給

さること、は思ひしつむれとえなんたへさ

りけるめのとの少将とてあてやかなる

人はかり御はかしあまかつやうのものと

りてのるひとたまひによろしきわか

人わらはなとのせて御をくりに

まいらす

【校異1】「湖月抄」中160-1／「4」めのとの少将Ⅱめのと少将

※めのとの少将Ⅱ〈青〉大島本（底本）・御物本、〈別〉麦生本・阿里莫本

【校異2】「大成」2―608（底本…大島本 飛鳥井雅康筆） 異同なし

※全文一致伝本…〈青〉大島本（底本）・御物本

【該当箇所】「5」源氏は姫君を迎えに訪れ、悲しみの明石の君を残して

二条院に帰る「大系」2―221、「新大系」2―221、「全集」2―424、「新全集」

2―434、「集成」3―156、「文庫」4―24、「評釈」4―156

二十 朝顔

【翻字】

あさかほ

かれたる花ともの中にあさ顔のこれかれにはひまつ

はれてあるかなきかにさきてにほひもことにかはれ

るをおらせ給てたてまつれ給けさやかなりし御

もてなしに人わろき心ちし侍りてうしろても

いか、御らんしけんとねたくされと

みしおりの露 花のさかりは

わすられぬ

過やし

あさかほの

ぬらん

【校異1】「湖月抄」中―203―1／「5」いか、↓いとどいかが

【校異2】「大成」2―643（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「5」いか、Ⅱ〈別〉伝二条為氏筆本↓いと、いか、 ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「4」翌朝早く朝顔の花につけて朝顔の斎院に歌、源氏はあきらめきれない思い「大系」2―254、「新大系」2―257、「全集」2―466、「新

全集」2―475、「集成」3―195、「文庫」4―53、「評釈」4―259

二十一 少女

【翻字】

をとめ

六条京極わたりに中宮のふるきみやのほとりを四ま
ちにしめて造らせ給式部卿の宮あけんとしそ

五十になり給ひけるを御賀のことたいのうへおほし

まうくるにおと、もけに過しかたき事ともなりと

おほしてさやうの御いそきもおなしくはめつらしからん

御家ゐにてといそかせ給

【校異1】「湖月抄」中―286―10／「1・2」四まちに↓四まちを

【校異2】「大成」3―707（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」六条京極Ⅱ〈別〉伝二条院讃岐筆本・陽明家本・保坂本・麦生本・

阿里莫本↓六条京極の「1」ふるきみやⅡ〈青〉池田本・肖柏本・三

条西家本↓御ふるき宮「1・2」四まちに↓よまちを「2」しめてⅡ

〈青〉横山本・平瀬本・池田本・肖柏本・三条西家本（底本を除く青表紙本）、

〈河〉全て（御物本・七豪源氏・高松宮家本・大島本。鳳来寺本・尾州

家本）、〈別〉全て（伝二条院讃岐筆本・陽明家本・保坂本・国冬本・麦

生本・阿里莫本）↓こめて「3」なり給ひけるをⅡ〈青〉横山本・平

瀬本・池田本・三条西家本、〈河〉高松宮家本、〈別〉伝二条院讃岐筆本・

陽明家本・保坂本・麦生本・阿里莫本↓なり給ける「5」おなしくは

Ⅱ〈青〉横山本・平瀬本・池田本・肖柏本・三条西家本（底本を除く青

表紙本）、〈河〉全て（御物本・七豪源氏・高松宮家本・大島本・鳳来寺

本・尾州家本）↓おなしく ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「30」源氏の六条院造宮、新邸で式部卿の宮の五十賀を催す計画 「大系」2―320、「新大系」2―321、「全集」3―70、「新全集」3―76、「集成」3―272、「文庫」4―111、「評釈」4―451

二十二 玉鬘

【翻字】

玉かつら

此戸くちにいるへき人は心ことにこそと

うちわらひ給てひさしなるおましにつゐ

ゐ給て火こそいとけさうひたる心ちすれおやの

かはゆかしきものこそきけさもおほさぬか

とてき帳すこしをしやり給わりなく

はつかしければそはみておはするやうたいなといと

めやすくみゆれはうれしくて今すこしひ

かりみせんやあまり心にくしとの給へは

右近か、けてすこしよす

【校異1】「湖月抄」中―341―10／異同なし

【校異2】「大成」3―749（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「2」うちわらひ〓《青》肖柏本、《河》七豪源氏・高松宮家本・鳳来寺本・尾州家本・大島本、《別》全て（陽明家本・保坂本・国冬本・麦生本・阿里莫本）↓わらひ ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「18」六条院入りした夜、源氏は玉鬘のもとを訪れてその姿を見る 「大系」2―365、「新大系」2―364、「全集」3―123、「新全集」

3―129、「集成」3―321、「文庫」4―147、「評釈」5―129

二十三 初音

【翻字】

初音

あれたる所もなけれと住給はぬ所のけはひはしつ

かにておまへの木たちはかりそいとおもしろく紅

梅のさきいてたるにほひなとみはやす人もなきを

見わたし給て

故郷の春のこすゑにたつねきて世のつ

ねならぬ花をみるかなひとこち給へとき、

しり給はさりけむかし

【校異1】「湖月抄」中―370―6／異同なし

【校異2】「大成」3―772（底本…池田本 伝二條為明筆） 異同なし

※全文一致伝本…《青》池田本（底本）・肖柏本

【該当箇所】「9」二条東院の人々、源氏は末摘花を訪れ、寒そうな姿を目にし、絹、綾などをつかわす 「大系」2―386、「新大系」2―387、「全集」3―149、「新全集」3―155、「集成」4―22、「文庫」4―164、「評釈」5―191

二十四 胡蝶

【翻字】

こてふ

花園のこてふをさへやしたくさに秋まつ虫は

うとく見るらむ宮かの紅葉の御かへりな

りけりとほゝえみて御らんすきのふの女房

たちもけに春の色はえおとさせ給ましかり

けりと花におれつゝきこえあへりうくひすの

うらゝかなる音にとりの楽はなやかにきゝわた

されて池の水とりもそこはかとなく囀わたる

に急になりはつる程あかすおもしろし蝶は

ましてはかなきさまに飛たちて山吹の

ませのもとにさきこほれたる花のかけに

舞いつる

【校異1】「湖月抄」中1388-9／異同なし

【校異2】「大成」3-786（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）異同なし

※全文一致伝本・（青）大島本（底本）・三条西家本（ただし、見せ消チ・補入・書き入れあり）

【該当箇所】「5」中宮の季の御読経、紫の上は童八人を鳥蝶に装束させて秋好中宮につかわす 「大系」2-400、「新大系」2-405、「全集」3-164、「新全集」3-172、「集成」4-38、「文庫」4-174、「評釈」5-235

二十五 蛩

【翻字】

ほたる

蛩をうすきかたにこのゆふつかたいとおほくつゝみをきてひかりをつゝみかくし給へりけるをさりけなく

とかくひきつくろふやうにて俄にかくけちえむ

にひかれるにあさましくてあふきをさしかくし給

へるかたはらめいとおかしけなり

【校異1】「湖月抄」中1414-8／異同なし

【校異2】「大成」3-808（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）異同なし

※全文一致伝本・（青）大島本（底本）・横山本・為家本・池田本・肖柏本・三条西家本（河）七豪源氏・高松宮家本・保坂本・平瀬本・尾州家本

【該当箇所】「3」蛩の宮の訪れ、源氏は玉鬘のかたわらで多くの蛩を放つ 「大系」2-423、「新大系」2-429、「全集」3-192、「新全集」3-200、「集成」4-63、「文庫」5-22、「評釈」5-298

二十六 常夏

【翻字】

床夏

此御かたのたよりにたゝすみおはしてのそき給へればすたれたかくをしはりて五節の君とてされたる

わか人のあるとすくろくうち給てをいとせちにをし

もみてせうさいといふこゑそいとしたときやあなうたて

とおほして御とも人のさきをふをもてかきせいし

給てなをつま戸のほそめなるよりさうしのあ

きあひたるをみいれ給

【校異1】「湖月抄」中1463-3／「4」せうさい↕せうさいせうさい

【校異2】「大成」3-843（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」給へれば↕給へは 「3」すくろく↕（河）至て（御物本・高松宮家本・

尾州家本・伝藤原為家筆本・平瀬本・鳳来寺本・大島本）、〈別〉国冬本
↑すくろくをそ 「4」せうさい↑せうさいく 「4」いふⅡ〈河〉大
島本、〈別〉保坂本↑こふ ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「11」大臣は近江の君の部屋をのぞき、双六を打つ姿をかい
ま見、女御への出仕を勧める 「大系」3-27、「新大系」3-18、「全集」
3-234、「新全集」3-242、「集成」4-102、「文庫」5-50、「評釈」5
-399

二十七 篝火

【翻字】

篝火

かゝり火にたちそふ恋のけふりこそ世にはたえせぬ

ほのをなりけれいつまでとかやふすふるな

らてもくるしきしたもえなりけりとき

こえ給ふ女君あやしのありさまやと

おほすに

ゆくゑなきそらにけちてよかゝり火の

たよりにたくふ

煙とならば

【校異1】「湖月抄」中-478-7／異同なし

【校異2】「大成」3-856（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）異同なし

※全文一致伝本…〈青〉大島本（底本…御物本・為家本・肖柏本〈河〉
七豪源氏・高松宮家本・大島本・鳳来寺本・尾州家本

【該当箇所】「2」庭の篝火をともさせ、琴を枕にして玉鬘に添い臥し、

歌を詠み交わす 「大系」3-41、「新大系」3-30、「全集」3-249、「新
全集」3-257、「集成」4-117、「文庫」5-58、「評釈」5-429

二十八 野分

【翻字】

野分

にしのたいにはおそろしと思あかし給けるなこりに

ねすくして今そかゝみなど見給けることくしく

さきなをひそとの給へはことに音もせていり給

【校異1】「湖月抄」中-496-12／異同なし

【校異2】「大成」3-873（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「3」音もせてⅡ〈青〉三条西家本、〈河〉全て（七豪源氏・高松宮家本・
尾州家本・平瀬本・鳳来寺本・大島本）、〈別〉保坂本・麦生本・阿里莫
本↑をとせて ※全文一致伝本…〈青〉三条西家本（ただし見セ消チあり）

【該当箇所】「10」源氏が玉鬘のもとを訪れ、たわぶれかかる姿を夕霧は
かいま見してあやしく思う 「大系」3-57、「新大系」3-46、「全集」
3-269、「新全集」3-277、「集成」4-136、「文庫」5-71、「評釈」5
-473

三 考察

本稿で採り上げた桐壺巻から野分巻までの二十八帖について、まず
「絵所」の本文について見てみよう。江戸時代中期頃写ということにな
ると、版本からの引用が考えられる。そこで、まず『湖月抄』の本文と

比較した。その結果、「二 箒木」「三 空蟬」「四 夕顔」「七 紅葉賀」「八 花宴」「九 葵」「十 賢木」「十一 花散里」「十三 明石」「十四 滯標」「十五 蓬生」「十六 閑屋」「十七 絵合」「十八 松風」「二十二 玉鬘」「二十三 初音」「二十四 胡蝶」「二十五 蛩」「二十七 篝火」「二十八 野分」の、実に二十帖が、『湖月抄』の本文と一致した。とくに、「大成」を参照しても、「絵所」と『湖月抄』のみが同一の本文をもつ次の例は、踊り字「、」と仮名「ら」のわずか一文字の異同ではあるが、両者の繋がりを示唆するものであろう。

七 紅葉賀 「4」 まかは、いたく↓まかはらいたく

また、残りの八帖について、「絵所」本文を「大成」諸本と比較すると、「絵所」の独自本文は、次の三帖、五箇所に見出される。

- 五 若紫 「5」 ふかく↓ふかき、「6」 入るたり↓いりゐたりける
 二十一 少女 「1・2」 四まちに↑よまちを
 二十六 常夏 「1」 給へれば↓給へは、「4」 せうさい↓せうさい

若紫巻の「6」の例は、本文の末尾にあたり、文末の助動詞「けり」を落としたかと考えられる。その他の例も、書写過程における、活用語の語尾や助詞・助動詞、踊り字の誤写が想定されよう。

では、その他の帖はいえ、まず目に付くのが青表紙本系統の肖柏本との共通性である。次の例は、『湖月抄』では「かぎのあづかり」で、「か

きあづかり」とする「絵所」とは異なる。「大成」諸本中、「絵所」と一致するのは、肖柏本のみである。

六 末摘花 「1」 かきあづかり⇄「青」肖柏本↓かきのあづかり

また、『湖月抄』とは異なる「絵所」の本文が、別本に一致する箇所もある。

一 桐壺 「2」 めさむは⇄「別」陽明家本・国冬本↓めさんことは

二十 朝顔 「5」 いか、⇄「別」伝二条為氏筆本↓いと、いか、

別本はもちろん、個々の写本で性格が異なるが、「こと」「いと」といった、他本が有する語をもたないという共通する傾向は見出されよう。

十二 須磨 「3」 かけのやうに⇄「青」横山本（「に」補入）・三条西家本（「や」補入）、〈別〉御物本↓かけのやうにや

右の例は、『湖月抄』では「かけのやうにや」で、「大成」の右に列挙した伝本以外の、多くの諸本本文に一致する。「絵所」は「や」をもたないが、青表紙本系統、横山本の補入後の本文、三条西家本の補入前の本行の本文、および別本の御物本と一致している。

さらに、「十九 薄雲」の例では、「絵所」に「めのとの少将」とあるところを、『湖月抄』では「めのと少将」とする。「絵所」と同一なのは、

青表紙本系統の大島本、御物本と、別本の麦生本・阿里莫本である。このうち大島本と御物本は、「絵所」の引用文全体と一致する本文をもっている点には留意しておきたい。

以上、「絵所」本文を『湖月抄』と比較し、異同箇所を「大成」によって検討してきた。それでは、「絵所」の大部分を占める、『湖月抄』と共通する本文は、「大成」諸本中はどう位置付けられるのか。

まず目に付くのは、やはり肖柏本との共通性である。肖柏本には、「大成」中では独自異文だが、「絵所」『湖月抄』の共通本文に一致する例がある。「十賢木」「十三明石」「十四滯標」「十八松風」の四帖に見受けられる。

また、肖柏本と酷似するといわれる三条西家本にも、「絵所」『湖月抄』との共通性が窺える。「三空蟬」「二十八野分」の二帖は、「絵所」と『湖月抄』、そして三条西家本で本文が一致する。ただし、三条西家本の場合、いずれも見せ消子を伴う本文であり、見せ消子前の本文が「絵所」『湖月抄』と一致するという点で注意を要する。

ところで、「絵所」と「大成」底本（大島本・池田本など）との異同箇所において、「絵所」と『湖月抄』、そして、肖柏本・三条西家本の四本が一致する本文をもつ場合は、比較的多い。

- 一 桐壺 「1」まいれるか 〓 〈青〉肖柏本・三条西家本 〓 まいれる、
「6」たてまつる 〓 〈青〉肖柏本・三条西家本 〓 たてまつるに
十七 絵合 「2」なかに 〓 〈青〉肖柏本・三条西家本 〓 うちに、「2」
ゑをなんて、〓 〈青〉肖柏本・三条西家本 〓 ゑを

三条西家本には、次の例のように、「大成」諸本中唯一、「絵所」『湖月抄』と同じ本文をもつ例もある。

- 十七 絵合 「4・5」さふらひ給ふを 〓 〈青〉三条西家本 〓 おはするを

引用文が短い「十六関屋」や、本文が比較的安定している「二十五螢」「二十七篝火」では、青表紙本系統の他、河内本系統や、場合によっては別本の本文とも、「絵所」『湖月抄』の共通本文が一致することがある。だが、河内本系統の、他系統・他本にはない独自異文を「絵所」『湖月抄』に見出すことは、まずないようである。

ただし、河内本系統と別本に見られ、青表紙本系統にはない異文が、「絵所」『湖月抄』の共通本文に存することもある。

- 二 箒木 「4」見給つゐてに 〓 〈河〉全て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本）、〈別〉国冬本 〓 み給
九 葵 「5」人くも 〓 〈河〉全て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・源氏古註・大島本）、〈別〉全て（御物本・陽明家本） 〓 人も
二十六 常夏 「3」すくろく 〓 〈河〉全て（御物本・高松宮家本・尾州家本・伝藤原為家筆本・平瀬本・鳳来寺本・大島本）、〈別〉国冬本 〓 すくろくをぞ 「4」いふ 〓 〈河〉大島本、〈別〉保坂本 〓 こふ

このような例からは、河内本よりもむしろ、別本と、「絵所」『湖月抄』との近さを見出すべきかもしれない。次の例は、「絵所」『湖月抄』の同一本文で、「大成」では別本のみが同じ本文をもつ例である。

二十一 少女 「1」六条京極Ⅱ〈別〉伝二条院讃岐筆本・陽明家本・保坂本・麦生本・阿里莫本⇕六条京極の

本文の検討の最後に、「大成」底本文が独自異文、もしくは少数派であって、他の諸本と「絵所」『湖月抄』が共通する本文を有する場合を列挙しておく。

十二 須磨 「4」なみたをⅡ〈青〉底本以外全て（横山本・池田本・飯島本・肖柏本・三条西家本）、〈河〉全て（七豪源氏・高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本）〈別〉全て（御物本・陽明家本）⇕なみたひとめ

二十一 少女 「2」しめてⅡ〈青〉横山本・平瀬本・池田本・肖柏本・三条西家本、〈河〉全て（御物本・七豪源氏・高松宮家本・大島本・鳳来寺本・尾州家本）、〈別〉全て（伝二条院讃岐筆本・陽明家本・保坂本・国冬本・麦生本・阿里莫本）⇕こめて、「3」なり給ひけるをⅡ〈青〉横山本・平瀬本・池田本・三条西家本、〈河〉高松宮家本、〈別〉伝二条院讃岐筆本・陽明家本・保坂本・麦生本・阿里莫本⇕なり給ける

このような箇所は、「絵所」『湖月抄』本文が、「大成」底本よりも一般

的な本文を有していることになる。

以上の考察から、「絵所」本文は、大部分『湖月抄』に一致し、その本文は、青表紙本系統の肖柏本や三条西家本、とくに肖柏本に近い帖が目立つということがわかる。また、河内本系統の本文の影響は比較的小なく、別本の本文を有する箇所も少数ながら見られるということが、どうやら言えるようである。

ところで、本書は、「言葉書」のその名の通り、『源氏物語』の本文は抜き書きされているが、それに対応する絵は収められていない。そこで、源氏絵には類型化した絵柄が存することから、試みに、承応三年（一六五四）版『源氏物語』（略称「承応版」）の挿絵の中に、該当すると推定される絵を見出してみたい。

「承応版」には、桐壺巻から野分巻まで、巻ごとに一／八図が収められている。いま、それらの図の中で、「絵所」が記す場面を推定すると、次のようになる。

一 桐壺〔全5図〕	第4図に該当
二 簀木〔全8図〕	第1図に該当
三 空蟬〔全2図〕	第2図に該当
四 夕顔〔全7図〕	第2図に該当
五 若紫〔全8図〕	第1図に該当
六 末摘花〔全5図〕	第4図に該当
七 紅葉賀〔全5図〕	第4図に該当
八 花宴〔全2図〕	第1図に該当
九 葵〔全6図〕	第1図に該当

- 十賢木〔全8図〕 第1図に該当
- 十一花散里〔全1図〕 第1図に該当
- 十二須磨〔全8図。うち見開き1図。〕 第2図（右下部分）に該当
- 十三明石〔全6図〕 第5図に該当
- 十四潯標〔全4図。うち見開き1図。〕 第2図に該当
- 十五蓬生〔全3図〕 第1図に該当
- 十六関屋〔全1図〕 第1図に該当
- 十七絵合〔全2図〕 第2図に該当
- 十八松風〔全3図〕 第3図に該当
- 十九薄雲〔全3図〕 第1図に該当
- 二十朝顔〔全3図〕 第1図に該当
- 二十一少女〔全6図〕 該当図なし
- 二十二玉鬘〔全4図。うち見開き1図。〕 第4図に該当
- 二十三初音〔全2図〕 第2図に該当
- 二十四胡蝶〔全2図。うち見開き1図。〕 第1図（見開き）に該当
- 二十五蛩〔全2図〕 第1図に該当
- 二十六常夏〔全3図〕 第3図に該当
- 二十七篝火〔全1図〕 第1図に該当
- 二十八野分〔全2図〕 該当図なし

以上のように、本稿で扱った帖においては、「絵所」の示す源氏絵は、「承応版」の挿絵に、おおよそ包含できるようである。だが、六条院を造営し、そこで式部卿宮の五十賀を催そうと計画する光源氏と紫上の場面（二十一少女）、寝過ごした玉鬘が鏡に向かっているところに源氏が

入っていく場面（二十八野分）については、該当図が見出せない。このうち後者は、『源氏物語絵詞―翻刻と解題―』（片桐洋一・大阪女子大学物語研究会編著、大学堂書店、昭和五十八年一月）に、該当箇所後の場面が説明されている（五四・五五頁）が、より視野を広げた考察は、今後の課題としたい。

付記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における二〇一七年度春学期の授業「日本古典文学情報特論Ⅰ」の内容の一部であり、また、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも平成28～30年度）における研究の一部である。